



TITLE:

米穀關稅と輸出地の米價 (特別號)

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

CITATION:

河田, 嗣郎. 米穀關稅と輸出地の米價 (特別號). 經濟論叢 1926, 22(1): 26-50

ISSUE DATE:

1926-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128365>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第

卷二十二第

行發日一月一年五十正大

特別號

重複課税の本質……………法學博士 神戸 正雄

米穀關税と輸出地の米價……………法學博士 河田 嗣郎

世界經濟の成立過程……………法學士 作田 莊一

清酒庫出税と租税の立替……………法學士 汐見 三郎

西陣の補助業に就て……………經濟學博士 本庄 榮治郎

商品の萌芽形態けるに於社會的性質……………經濟學士 谷口 吉彦

マルクスの所謂社會意識形態に就いて……………法學博士 河上 肇

朝鮮產米増殖計畫と世論……………法學博士 山本 美越乃

家産制度の利弊……………經濟學士 八木 芳之助

海運に於ける表定運賃の特質……………法學士 小島 昌太郎

(禁轉載)

米穀關稅と輸出地の米價

河 田 嗣 郎

一

本誌第二十卷第六號及び第二十一卷第一號に於て私は我國の米穀輸入關稅が米價に對して與ふる影響に就いて論ずる所があつた。即ち米穀輸入關稅の産業保護政策上の效果に就いて攷究せんが爲めに、それが賦課せられる結果として米價を騰貴せしむるに足る力を有するや否やを、實地に論證せんと試みたのである。然るに其際の研究は米穀關稅のわが内地市場に於ける米價に對する效果のみを見たのであつて、それが輸出國市場に於て米價に如何なる影響を及ぼすかは、後日の研究に残して置いた。

仍て茲には我國に輸入さるゝ外國米の主要輸出國に就いて、其の市場に於ける米價が、我國に輸入關稅が設けられたり廢せられたりすることに依り、又はその稅率が引上げられたり引下げられたりすることに依て、果して影響を受けたか否か、受けたとすれば如何なる程度の影響を受け

たかに就いて、研究を續けて見たいと思ふ。蓋しこの研究を試むることに依て、我國の米穀輸入關稅が内地に於て負擔せられるか、輸出地に於て負擔せられるか、若し分擔せられるとすれば凡そどの位の割合で分擔せられるか、各場合々に就いて窺ひ得られるからである。そして其の負擔の狀況に依つて、我國の米穀輸入關稅が内地米作農業の保護政策として、どれだけの價值と效果とを有ち得るか、大體に於て窺ひ得られるからである。

二

そこで先づ我國に對する米穀の供給國としては如何なる國々が重要な地位を占むる國々であるかを調べて見なければならぬ。試に農商務省の調査にかゝる米穀輸入仕出地別による年々の數量を見れば、左表の如き有様である。¹⁾

第一表 米穀輸入額(仕出地別)表

仕出地	大正八年		大正九年		大正十年		大正十一年		大正十二年	
	輸入數量 對する割合	輸入數量	輸入數量 對する割合	輸入數量	輸入數量 對する割合	輸入數量	輸入數量 對する割合	輸入數量	輸入數量 對する割合	輸入數量
支那	七五、三六%	七五、三六%	七五、三六%	七五、三六%	七五、三六%	七五、三六%	七五、三六%	七五、三六%	七五、三六%	七五、三六%
暹羅	三六、四三%	三六、四三%	三六、四三%	三六、四三%	三六、四三%	三六、四三%	三六、四三%	三六、四三%	三六、四三%	三六、四三%
其他	八、二一%	八、二一%	八、二一%	八、二一%	八、二一%	八、二一%	八、二一%	八、二一%	八、二一%	八、二一%

論叢

米穀關稅と輸出地の米價

第二十二卷

(第一號)

二七

二七

1) 農商務省食糧局『第二次米穀統計』(日本之部) 75頁

論叢

米穀關稅と輸出地の米價

第二十二卷 (第一號) 二八

佛領印度	二〇、五三	三三	三三、三五	四	五九、〇〇元	六	九三、〇〇	一四	四〇、〇元
英領印度	〇	〇	〇	〇	八、四七	四	二八、三五	四三	二〇、五五
暹羅	一、六六	一	三	一	五、〇二	七	三二、七六	一八	二七、六九
關東州	〇	〇	八	一	〇	〇	〇	〇	〇
計	八四、七九	三〇	三九、六二	一〇	三〇、八四	二〇	六六、九二	一〇〇	四七、三

即ち各仕出地より輸入せらるゝ數量は年々著しき變動あり、或年には支那が最も多量の供給をして呉れたかと思へば、又或年には英領印度より最も多くの輸入が行はれ、又或年には暹羅が最も重要な供給國たる地位に上ばるといふ有様である。そしてそれは年々に於ける生産地の作柄の如何と我國との商取引關係の如何とに依ることであつて、洵に見定めのつき難いことである。けれども表中の此等諸國何れもが我國に對する主なる米穀供給國たることだけは明かであつて、此等の國々相互の間に於ける我國に對する仕出地としての地位こそ年によつて變動すれ、我國に取つては何れ劣らず重要である。然し其中に在つて支那は特殊の事情を有するから、つまり英領印度特にビルマと佛領印度と暹羅とが、我國に對する米國供給國として最も重要な地位を占むる國々たることは、人のよく之を知る通りである。

尙ほ他の資料により大正十三年に於ける米穀輸入額を仕出地別と種類別とに就いて示してゐる。

第二表 大正十三年米穀輸入額表

種 類	白 米	碎 米	玄 米	其 他	計
仕出地名					
英領印度	三、六四〇、二二一	五四四、四三三	八、三六六	〇	三、六四〇、九六〇
暹 羅	六、四七、五五五	一、五九四、七六九	〇	三、〇三三	二、二四一、三三七
佛領印度支那	一、五〇〇、二二〇	六〇、四八七	九、四七七	〇	一、六〇〇、一九四
北米合衆國	一、六五、五五一	五、二六九	九四、九九九	〇	三、四、九九九
支 那	三三、二六二	五、四六一	二、五五九	四六	二、六、六九九
關 東 州	二、五五七	一、六三三	〇	一九	三、二、四〇〇
海峽殖民地	〇	九、二五四	〇	〇	九、二五四
露領亞細亞	八、二四三	〇	七九七	五五	九、〇九四
蘭領印度	一、七八八	〇	〇	〇	一、七八八
香 港	七〇九	〇	〇	〇	七〇九
西班牙	一六九	〇	一六九	〇	三六八
假置場不詳	八六九	三	〇	〇	八七二
計	六、三三、三三三	一、八七、五九八	二、六、三三七	三、七七	八、六六、六四四

此表は合計に於て輸入數量の多い國から順次に掲げられてあるから、一見直ちに何れが供給國として其年重要なる地位を占めたかわかる。即ちやはり英領印度・暹羅及び佛領印度の三國が

最も重要な國々であつた。そして北米合衆國や露領亞細亞等から近年追々盛に米穀輸入の行はるゝに至つたことは、その事柄自體としては注意せなければならぬ所だが、我國に對する米穀輸出國としてのその地位はまだあまり重きを爲すには足らぬのである。

三

事情上に示す如くなるが故に、我國に對する米穀の供給國としては、英領印度と暹羅と佛領印度とが、最も重要な地位に在るを否み難いとして、然らば今獨り日本への供給國としてのみ之を謂はず、廣く世界全體に涉つて之を観察して、米穀輸出國としては、何れの國が重きを爲して居るかを見るに、やはり此等の三國が最も重要な地位に在るを知ることが出来る。試に之を數字に照して、世界全體及び其の各洲に於ける米穀輸出額の合計額と、此等の國々の輸出額とを比較してみやう。³⁾

第三表 世界各地米穀輸出額表

	大正五年 九年平均	大正十年	大正十一年	大正十二年
英領印度	二二六、九六六	二八三、七七一	二四四、五五五	二六三、九六六
佛領印度支那	八四、五五五	九八、六六六	六六、六六六	七三、三三三
	石	石	石	石

3) 農林省農務局『第二次米穀統計』(世界之部)45-51頁

暹	五〇三、六二七	七、五七、九七	七、五七、九七
亞細亞諸國合計	三、八二、三〇〇		
北及中央亞米利加合計	一一、二、五二		
南亞米利加合計	四二、九六五		
歐羅巴合計	八九、八五		
亞弗利加合計	二九、二九三		
太平洋合計	一、四、七六〇		
總計	三、五七、八四		

註：表中a印を附したるは概であつてb印を附したるは脱桴したる米である。

是に因て觀れば、世界に於ける米穀輸出貿易總額中其の大部分は亞細亞諸國よりの輸出であつて、遙か下つて北及中央亞米利加之に次ぎ、次は歐羅巴で、次は南亞米利加、次は亞弗利加、次は太平洋といふ順序である。即ち大正五年より九年に至る五ヶ年平均輸出額に就いて見るに、輸出總額三千五百六十九萬石中、亞細亞諸國よりの輸出額は三千二百八十二萬餘石に上ぼり、恰もその九割二分強に當つて居る。然るに其の亞細亞諸國中に在つては又英領印度と佛領印度と暹羅との輸出が大部分を占めて居ることも右表に照して明かであつて、大正五年より九年迄の平均に於ては、此の三國の輸出額を合計すれば二千三百七十九萬八千餘石となり、恰も亞細亞輸出合計額の七割四分弱に當る次第である。實に此等の三國は世界に於ける米穀輸出地としては最も重き

地位に居ることが窺ひ得られる。

然らば次に此等の諸國より我國に向けて輸出せらるゝ米穀は何程の額に上ばり、其の總輸出額中の何程の歩合に當るかといふことが、私の研究に取つては重要な意義をもつのであつて、それを窺つて見なければならぬが、それは此等の國々各別に就いて見ることにする。そしてそれを爲すに先つて今一つ此等三國の比較に於て米價の變動の狀況を検し、之を同時期に於ける我國内地の米價變動の狀況と對照して見るのだが、研究を進むるには、便利なことである。仍て試に大正元年より十二年に至る各年の平均米價を比照すれば左表の示す通りである。内地米價に就いては神戸市場(米肥市場)標準中米相場を掲ぐることにする。(二石につき圓)

第四表 外米及内地米相場比較表

大正 元年	二 年	三 年	四 年	五 年	六 年	ラングーン白米 (Special strains quality) 月	バンコック 白米二等 月	サイゴン 二等日本向 月	神 戸 米 卸 相 場 月
同	同	同	同	同	同	一	一七・〇〇	一三・〇〇	三・三三
同	同	同	同	同	同	九・七	二・七	八・七	三・九二
同	同	同	同	同	同	八・三	一〇・四	八・〇三	二・五五
同	同	同	同	同	同	九・三	一〇・壹	八・六三	二・三三
同	同	同	同	同	同	八・六	二・六	八・九五	三・九七
同	同	同	同	同	同	七・七	二・元	九・二四	一・九八

4) 第二次米穀統計世界之部93頁
第二次米穀統計日本之部29-30頁

同	七年……………	八・七	一七・九	三・五	三・〇
同	八年……………	三・三	三七・〇	六・六	四・八
同	九年……………	二・五	一八・五	三・九	四・七
同	十年……………	三・六	一四・八	三・三	三・五
同	十一年……………	三・四	一八・四	八・〇	三・三
同	十二年……………	三・四	一七・六	八・六	三・九

右の比較は、三國の相場は白米相場なるに内地米相場は玄米であり、甚だ正確ならざる比較であるけれども、然し茲では大體に於ける米價變動の彼此相對關係を知るを得ば事足る次第だから、此種の比較表でも大した不都合はないと思ふ。そして其の比較について見れば、大正三四年の頃には内地米價も低かつたやうに、ラングーン相場もバンコック相場もサイゴン相場も何れも皆低かつた。然るに大正七、八、九年にかけては、内地米價の奔騰を見たるが如く、右の三外國市場に於ける相場も著しき騰貴の勢を示し、其勢特に西貢と湄谷とに於て著しく、然かも其の騰貴歩合に至つては、内地米に於けるよりも多大なる有様であつた。次で大正十、十一、十二年に於ては、内地米價もやゝ下落したやうに、三市場相場も下落し、特にサイゴン相場の下落は最も著しかつた。

此の簡單なる比較に依て見ても、我國内地市場に於ける内地米の相場と、我國に輸入さるゝ外

米の輸出地に於ける相場との間には、密接なる關係あるを知ることが出来る。即ち外米輸出地相場は、大體に於て相呼應し相伴つて騰落するものと見て差支なく、然かもそは、我國内地に於ける米穀需給の狀況により内地米相場の變動する狀態との間にも、呼應關係の存するを認めることが出来る。この呼應關係は何によつて生ずるか、即ち我國の内地米相場が先づ動いてそれに促されそれに伴つて輸入米生産地に於ける相場も動くのか、それとも世界的に之を見て、世界全體に渉る米穀市場の需給關係が綜合せられ、その關係の變動に依つて、我が内地市場の米穀相場も變動し、外國市場の相場も之と同時に同じ方向に向つて變動するのか、その邊の事情は大いに研究に値するものがある。今それ等の問題にまで立入つて研究を進むることは出来難いが、後に追々述ぶる所より之を推せば、世界一般に渉る米價の變動は大低同じ波を打ちつゝあり、然かもそが時を同じして同じ方向に動きつゝあるを知るに足りる。それについては又後に述ぶる所あるであらう。

仍て私は本題の道筋に沿ふて進むで、外米輸出地たる各主要國に於ける對日本米穀輸出の狀況を窺ひ、それから踏み込むで我國に設けられたり廢められたりする米穀輸入關稅が此等の輸出地の米價に對して果して如何なる影響を及ぼすかを詮索して見やう。

四

先づ英領印度の狀態に就いて見れば、最近に於ける其の米穀產額と輸出額との比較は左表の示すが如き有様に在る。

第五表 英領印度米產額表（ベンガル州外十三州合計）

大正八年度	大正九年度	大正十年度	大正十一年度	大正十二年度
一九一九—一九二〇	一九二〇—一九二一	一九二一—一九二二	一九二二—一九二三	一九二三—一九二四
米 三、一〇八、〇〇〇 ^噸	米 三、六六三、〇〇〇 ^噸	米 三、一七〇、〇〇〇 ^噸	米 三、四八六、〇〇〇 ^噸	米 二、八八八、〇〇〇 ^噸
穀 三、七七五、〇〇〇 ^石	穀 八、一〇一、〇〇〇 ^石	穀 三、五八六、〇〇〇 ^石	穀 三、七五五、〇〇〇 ^石	穀 一、五、四四五、〇〇〇 ^石

註 米印あるはハイデバラッド州を含まず。

次に輸出額については全土よりの輸出額とビルマ州よりの輸出額とを示して置く。我國に取つて重要な關係あるは謂ふ迄もなく後者である。

第六表 米穀輸出額

大正七年度	大正八年度	大正九年度	大正十年度	大正十一年度
一九二六—一九二七	一九二七—一九二八	一九二八—一九二九	一九二九—一九三〇	一九三〇—一九三一
全土輸出額 二、〇三三、五五五 ^噸	全土輸出額 二、〇三三、五五五 ^噸	全土輸出額 一、〇三三、五五五 ^噸	全土輸出額 一、〇三三、五五五 ^噸	全土輸出額 一、〇三三、五五五 ^噸
ビルマ州輸出額 一、一〇三、七五五 ^噸	ビルマ州輸出額 一、一〇三、七五五 ^噸	ビルマ州輸出額 一、一〇三、七五五 ^噸	ビルマ州輸出額 一、一〇三、七五五 ^噸	ビルマ州輸出額 一、一〇三、七五五 ^噸

右によつて見れば英領印度では生産されたる米穀中凡そ其の二乃至四パーセント位に當る量が

論叢 米穀關稅と輸出地の米價

第二十二卷（第一號 三五）

三五

- 5) 同書97頁
- 6) 同書98-99頁
- 7) 同書101-102頁

輸出されることがわかる。そして輸出額の中に在つてはビルマ州よりの輸出額が全土輸出額に對して凡そ八割乃至九割を占めて居る。

然らば今全土及ビルマ州より日本へ向け輸出さるゝ米穀の額及びそが總輸出額に對する歩合はと見るに、實に左表の如し。⁸⁾

第七表 日本へ向け輸出さるゝ額及歩合

	大正七年度	大正八年度	大正九年度	大正十年度	大正十一年度
全 土	105,845,999%	3(1)%	23,952,124%	42,148,333%	97,556,374%
ビルマ州	105,006,339%	26(0.01)%	23,423,100%	42,022,612%	97,556,374%

是に因て觀れば我國に輸入さるゝ英領印度產米は殆んど其の全部がビルマ州より輸出さるゝものと見て差支なく、他地方よりの輸出は殆んど多く意義を有ち得ざる有様である。そして其の對日本輸出量が總輸出量に對する歩合は、その輸出量が年に依つて著しく相違するため、最も少き殆んど歩合を示し難いほど少く、多きも漸く一割三分弱に及ぶに過ぎざる有様である。ともかく日本向輸出額も歩合もあまり多大のものでないことがわかる。

然らば次に彼地に於ける米穀相場は我國に於て其地產米の輸入に對し關稅が賦課せらるゝと否とに依て影響を被るや否やと見るに、右の如く我國への輸出が其の輸出總量に對して僅少なる實狀より察すれば、その影響の殆んど之れ無かるべきを想像するに難くない。即ち我國に於て蘭貢

米に對して關稅が賦課せられてそれが爲めに多少其の輸入が抑へらるゝにしても、彼地から之をいへば元來が比較的少額の輸出たるに過ぎぬから、其の輸出が今僅かばかり減少したからとて、其の結果米穀相場に影響するほどの影響は生じ得ざるものと見る外はない。まして我國に於ける輸入關稅が賦課さるゝと否とに拘らず、彼地よりの輸入は依然として内地にその必要あるだけ行はるゝに於ては、我が關稅は彼地の米價に影響を及ぼし得ざるは、當然のこと、謂ふ外はない。然るに我國に於ける外米の輸入は關稅の存否には無頓着にたゞ内地の米穀供給量が不足したり内地米價が著しく高くて下層階級が外米消費を増す事情あるにつれて、たゞそれを理由として行はれる實狀にあるから、關稅の存否は到底彼地米價に影響を及ぼすには足らないのである。之を彼地に於ける米穀相場表に照して月々の變動を窺つてみても、殆んど我が關稅の影響と思はるゝ所のものを認めることが出來ぬ。試に左表を掲げて置く。¹⁰⁾

第八表 葡貢に於ける白米價格表(百斤に付き圓)

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正 八年	四・〇五	三・九六	四・二三	四・四四	四・五五	五・四二	五・四三	五・八七	六・〇三	—	—	—
同 九年	七・〇四	七・四六	八・一六	七・九六	六・八〇	五・九六	六・四四	五・九六	五・九六	四・八六	五・七〇	—
同 十年	三・八一	三・九六	三・八七	四・九六	四・四四	五・七〇	五・〇六	五・四四	六・一三	六・一六	五・〇四	—
同 十一年	四・二四	四・六六	四・九五	五・三三	五・五五	五・四六	五・三三	五・三三	四・七三	四・八六	五・〇九	四・七〇

論 叢 米穀關稅と輸出他の米價

第二十二卷(第一號 三七) 三七

9) 本誌第二十一卷第一號所載、拙稿『米價と關稅との關係に就て』四四—四七頁参照

10) 第二次米穀統計世界之部104頁

同 十二年

四・八

四・六

五・三

五・三

五・六

四・六

四・〇

—

—

—

五・八

五・三

註 大正十二年八、九、十月は震災のため爲替相場が立たなかつた。

右表を見るに就いて、ゴシック活字を用ゐてある部分は、我國に於て輸入米穀每百斤壹圓の關稅の存したる時期に於ける相場を示すものたるを先づ注意するを要する。そして此の時期と然らざる時期即ち我が米穀輸入關稅の免除されたる時期とを比較して、その月々に於ける相場を見るに、殆んど其所に著しい變化の認むべきものが無い。即ち大正八年の下半期から九年の上半期にかけて彼地の米價は漸騰の勢を示して居た。然るに九年の下半期はやゝ下落に向つて來たのであつて、其間同年十一月から我國に輸入關稅の賦課の行はれることゝなつた爲めに相場は一時大いに壓迫されて十年の三月頃までは著しき下落を示したやうであつたが、然し其勢は四月からは又衰へて下半期にかけては却つて騰貴の勢を進めた。然かも其の下落も騰貴も共に我が内地市場に於ける内地米相場の上に同様に之を見た現象たるを注意せなければならぬ。そして同年十月までは我が關稅の存したるに拘らずそれには頓着なく騰貴し、十一月には關稅免除となつたけれど、又それが爲めに騰貴の勢を加へらるゝことはなく、十一年には關稅なきに拘らず却つて下落の勢に轉じた。然るに十一年十一月には又我國に米穀輸入關稅賦課さるゝことゝなつたに拘らず、相場は却つて一時騰貴に轉じ、十二年に於ても格別多く前年と違はざる値頃を呈して居たのであ

る。されば此の五年間の状況に於ては少くとも、我が關稅の影響の認むべきものなく、たゞ之れありたりとしたならば大正九年の十一月に關稅賦課さるゝことゝなつたと同時に彼地相場が半年ばかり下落の勢を呈した場合だけである。然し此の時期の相場下落が我が關稅の影響に因るか、それとも、我が内地市場に於ける米價一般の氣勢に促され之に呼應して然りしものは、更に精しく研究して見た上でなくては、斷言できぬことである。然し大體に於ては關稅の影響と見るべきよりも内地米價の變動の影響と見られる方が真相に近いであらう。其事は尙ほ後に示す西貢米相場等の場合と比較して考へて見なければならぬ。要するに關稅の影響全然之れ無しとはいふを得ないかも知れぬが、誰の目にも明かなるほどの影響の無かつたことだけは確かである。

そこで更に少しく、蘭貢米の彼地に於ける相場と我が神戸市場に於ける相場とを比較して見たいと思ふ。材料が不備なためたゞ大正十一年と十二年とについて之を試みる。¹²⁾

第九表 蘭貢米彼我市場相場比較表(百斤につき圓)

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正十一年												
神戸相場	八・〇〇	八・三	七・五	七・五	七・〇	七・〇	七・五	七・〇	六・七	六・六	六・三	六・三
蘭貢相場	四・四	四・七	四・五	五・三	五・五	五・五	五・三	四・八	四・七	四・八	五・〇	四・七
兩者の開	三・六	三・六	三・〇	二・二	一・五	一・五	二・二	二・二	二・〇	一・八	一・三	一・六

大正 十二年	神戸相場		關貢相場		兩者の開	
	六・七	七・五	四・九	四・六	一・五	二・五
	七・六	七・八	五・三	五・三	二・七	二・六
	八・四	八・九	五・六	五・六	二・六	二・六
	八・九	八・九	四・三	四・三	四・三	三・九
	八・三	八・三	—	—	—	—
	六・五	七・四	—	—	—	—
	七・五	七・九	—	—	—	—

大正十一年及其の翌年に在つては、十一年十月迄は我が米穀輸入關稅は免除されて居り、十一月から課せられ十二年九月まで存続したのである。そこで右第九表を検するに、神戸市場に在つては關貢米相場は十一年一月以降漸落の勢に在つたのに、十一月に關稅が賦課せられ其の結果十二年一月からは相場漸騰の勢に轉じ其勢は丁度九月まで繼續された。然るに其間内地米相場は下落して居るから、この關貢米相場の騰貴は關稅の影響に因るものと見る外はないのである¹³⁾。けれども翻て關貢市場に於ける相場を見れば一向に變化を被つた様子もなく十二年の相場はやはり一年のそれに比しやゝ騰貴したとはいへるにしても下落したとはいふことが出來ぬ。大體同様だつた。

して見れば此の期間に於ける我が米穀輸入關稅は關貢米の内地市價を騰貴せしめたに止まり、其の騰貴による負擔は内地消費者の頭上に落ちた。そして關貢市場は其の負擔に任ずることなく、平氣に其の時期を経過した。即ち之を彼我市場に於ける相場の開きについて見るも、大體その事情を窺ふことが出來るのであつて、大正十二年關稅繼續中の値開は其前の無關稅期の値開に

13) 本誌第二十一卷第一號摘稿五二一五三頁參照

比し概して大であつた。

要するに我が米穀輸入關稅は最近數年の實狀に於ては内地外米市價に影響し之を騰貴せしむる働はもつて居たが、輸出地の市價に影響する力は少くとも蘭貢米については有ち得なかつた。そして此の事情は我國の外米需要が内地米の供給不足の場合や其の著しく騰貴せる場合に、その補充とし是非必要とせられ、關稅の賦課は、その必要による輸入を抑制するには足らぬ實情ある所から、生ずるものと見なければならぬ。つまり關稅が有つても無くても必要なだけは輸入せられ、從て關稅は之を輸出地の生産者が負擔することなく、主として我國の消費者が又場合によつては輸入商人が一部分その負擔に任することゝなる次第である。少くとも蘭貢米については確かにさうである。

五

次に佛領印度に於ける狀態を見るに、彼地の米產額は、其の主要地方別にして左表¹⁴⁾に示すが如き數量に上ばつて居る。

第十表 佛領印度米產額表

論叢 米穀關稅と輸出地の米價

第二十二卷 (第一號 四一) 四一

14) 第二次米穀統計世界之部110-111頁

論叢 米穀關稅と輸出地の米價

第二十二卷 (第一號 四二)

四二

地方	年次	大正八年度	大正九年度	大正十年度	大正十一年度	大正十二年度
交趾支那	米	二、〇三〇、〇六六 佛噸	二、一六六、三五〇 佛噸	二、〇三二、〇五五 佛噸	二、〇三三、三〇〇 佛噸	二、一四四、二〇〇 佛噸
	白米	八、〇八八、九〇五 石	九、〇〇〇、七五三 石	八、八三四、七七一 石	八、六五五、八八一 石	八、九三九、九五〇 石
トンキン	米	一、五七七、〇〇〇 佛噸	一、六六六、五七一 石	一、六六六、五七一 石	一、六六六、五七一 石	一、六六六、五七一 石
アンナン	米	一、〇六六、〇〇〇 佛噸	一、〇六六、〇〇〇 佛噸	一、〇六六、〇〇〇 佛噸	一、〇六六、〇〇〇 佛噸	一、〇六六、〇〇〇 佛噸
	白米	四、五五〇、一七五 石	四、五五〇、一七五 石	四、五五〇、一七五 石	四、五五〇、一七五 石	四、五五〇、一七五 石

註 11 米は春作のみの數量である

右の如き生産量の中、外國に輸出せらるゝ數量と、日本へ向け輸出せらるゝ數量と、兩者の歩合關係とは左表の通りである。¹⁵⁾

第十二表 佛領印度米輸出額表

輸出總量	大正八年度	大正九年度	大正十年度	大正十一年度	大正十二年度
日本への輸出量	九、六八六、二二二 佛噸	一、八三三、五五五 佛噸	一、七〇二、四二七 佛噸	一、四九九、九五五 佛噸	一、三三三、四七七 佛噸
後者の對前者歩合	二四・七三二 %	三三・四四二 %	四四・七六四 %	五四・四四二 %	三六・〇〇七 %
	二四・五 佛噸	一・七 佛噸	六・九 佛噸	三・六 佛噸	二・八 佛噸

佛領印度より日本へ向け輸出さるゝ米穀の數量は、英領印度よりの數量に比し遙かに少量であるが、同國の米穀輸出總額の少きため、その總額に對する歩合からいへば、英領印度に於ける歩

合よりも大である。即ち日本への仕向けは、最近に於ては、最も少き場合で約二パーセント最も多い場合には二割五分弱にも及んで居る。従て佛領印度に在つては、日本への米穀輸出貿易はかなり重要な意義を有するを知らなければならぬ。

そこで進むで佛領印度に於ける米價について見るに、西貢に於ける白米價格は最近數年間に於て左表の如き有様を呈して居た。表中ゴシック活字を用ゐたる部分は、我國に於て米穀輸入關稅の存したる時期の相場である。(百斤につき圓)

第十一表 西貢に於ける白米(二等)相場表

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正八年	九・八四 ^四	九・五四	九・七六	九・三六	二・五二	三・〇七六	一・八九〇	—	三・四四	一九・九六	五・五九	六・七五
大正九年	二・五五	二・二六	二・五五	二・五五	二・五五	二・二七三	九・九三	九・九三	八・〇三	六・九三	四・九〇	四・四八
大正十年	四・〇六	三・五五	三・八六	三・八六	四・〇六	三・五五	三・九四	三・八六	三・五五	六・五三	五・七三	五・五八
大正十一年	—	—	—	—	—	五・五九	五・五三	五・五三	五・〇〇	五・六九	三・三三	三・六六
大正十二年	三・四六	三・四六	三・七五	三・九一	三・六六	三・四三	三・四三	—	—	—	六・三三	七・五九

右表に示す所の相場の變動に照して、我が米穀輸入關稅の影響と見らるべきものゝ認めらるゝ、や否やを檢するに、大正九年十一月に我が關稅の復活せられた際には、やはり關貢米相場に就いて之を見たやうに、相場が壓迫せられて居るのを認めることが出来る。然かも其の壓迫は關貢米

に於けるよりもや、長く繼續して居るが、それでもやはり十年下半年期に至つては又少しく騰貴の氣配を示して居る。そして十年十一月に關稅の免除された際には殆んど影響の認むべきものがなかつた。所がよく事情をしらべて見ると、大正九年に在つては我が内地市場に於ける内地米相場も一月以來漸落の勢を示して居り其勢特に十一月に於て著しく表はれて居るから、同年十一月に於ける西貢米價の下落は關稅の影響といふよりは寧ろ世界的需給關係に因つて然りしものと見る方が適當であらう。従て我が内地米相場の下落到呼應して居る。そして又十年下半年期に於ける騰貴もやはり内地米相場に於て之を見るを得る¹⁷⁾。

次に大正十一年十一月に又輸入關稅の復活された際に於ては、相場は殆んど何等の影響をも受けて居らぬやうであつて、十二年上半期の相場はどちらかといへば却つてや、騰貴氣配であつたといつてよい。

然るに此の期間に於て我國に輸入されたる西貢米の相場はどうであつたかといふに、九年十一月に關稅賦課さるゝことゝなつた際には、殆んど何等の影響の認むべきなく、たゞ十年十一月に關稅免除の行はれた結果其の前月に著しく騰貴の勢を呈した西貢米價が下落することゝなり、免除はその効果を表はし得たのであつた。次に大正十一年に在つては前年以來西貢米の内地市價は低かつたのに、十一月から關稅が復活さるゝと共に相場騰貴に轉じ、今回も亦關稅はその効果を

17) 第二次米穀統計日本之部41頁參照

18) 同上

市價の上に表はすことが出来た。

すべて這間の状態については私は既に本誌上に之を詳論して置いたから、¹⁹⁾茲にはたゞ其の結論だけを示すに止めるが、とにかく西貢米に關しては、その輸入關稅が内地市場に於けるその相場にかなり直接で靚面な效果を表はすに足り、大正九年以來最近の實狀に於ては積極消極ともに關稅の働が表はれ居ることを認めねばならぬ。

然らば即ち吾々は西貢米についても、我が輸入關稅は輸入されたる西貢米の内地市價には影響を及ぼし效果を示し得たけれども、輸出地たる彼地に於ける相場には殆んど何等の影響を及ぼし得なかつたものと見なければならぬ。そしてそれは恰も蘭貢米に於けると同様だつたことも忘れてならぬ所である。

六

次に暹羅國に於ける米穀の生産及輸出狀況等を見るに、大正四年及五年、大正十年及十一年度に於ける同國の米產額は左表の示す通りである。²⁰⁾

第十三表 暹羅國米產額表

論叢 米穀關稅と輸出地の米價

第二十二卷 (第一號 四五) 四五

19) 本誌第二十一卷第一號拙稿四九——五二頁參照

20) 第二次米穀統計世界之部104頁

大正四年度	一九一五—一九一六	大正五年度	一九一六—一九一七	大正十年度	一九二一—一九二二	大正十一年度	一九二二—一九二三
白米……………	三〇、七、〇〇〇 ^石	三、〇、五、〇〇〇 ^石	五、八、六、六三 ^石	五、九、九、六三 ^石			

即ち暹羅國の米產額は之を英領印度に比すれば大凡その十分一位のものであり、佛領印度と大體伯仲の間に在るものと見てよい。然らばその米穀輸出額はといふに、その全額及我國への輸出額左表の如し。²¹⁾

第十四表 暹羅米輸出額表

輸出總額……………	大正五年度 元一、五、七	大正六年度 元一、五、六	大正七年度 元一、五、六	大正八年度 元一、五、六	大正九年度 元一、五、三
日本への輸出額……………	元一、四、四、五三 ^兩	元一、四、四、四四 ^兩	元一、四、四、四四 ^兩	元一、四、四、四四 ^兩	元一、四、四、四四 ^兩
後者の對前者割合……………	—	—	—	—	—

右表に依て見れば暹羅より我國に輸出さるゝ米穀はそが米穀總輸出量に對する割合に於て、佛領印度に就いて之を見たる所よりも其の歩合低く、英領印度に於ける歩合に似て居るが、それよりもまだやゝ低いと見た方が適當であらう。従て米穀の輸出について日本が占むる地位の重要さは、佛領印度に於て最も重く、英領印度に於て之に次ぎたる地位にあり、暹羅に於ては比較上最も重きを爲して居らぬといつてよい。尤もそれは上數表に示す數字に照して之を見たるだけに關

21) 同書106頁

してのことである。

從て之をたい理論的に推斷すれば、米穀輸出貿易上日本の地位がやゝ重きを爲して居る佛領印度に於てすら、日本に米穀輸入關稅の存する否とは、其地の米穀市價には殆んど何等の影響を及ぼし得ないと謂はねばならぬ狀況だから、ましてや日本への輸出があまり重きを爲して居らぬ暹羅市場に在つては、日本輸入關稅の存否は、その市場に於ける米穀相場に何等の效果をも有し得ないものと見る外はない。この理論的推斷は果して事實に適合するであらうか。試に磐谷市場に於ける米穀相場の實狀について調べて見る。²²⁾(百斤につき圓)

第十五表 磐谷に於ける米穀相場表

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正 八年	二・四六	三・八五	二・九四	二・八八	二・三三	二・八〇	二・七九	二・五五	二・三六	二・七四	二・四二	二・四四
同 九年	七・三六	七・五四	七・二六	八・〇〇	八・五四	八・〇六	七・七六	六・九七	七・五五	七・五五	六・〇〇	六・〇〇
同 十年	五・〇四	四・三六	四・三三	四・三三	三・二六	三・九六	七・〇六	八・三二	六・七四	六・九二	六・八四	六・三六
同 十一年	六・七六	七・六五	七・五九	七・〇七	七・七三	七・五五	七・六六	七・〇八	六・八五	六・三三	—	—
同 十二年	六・八二	六・三九	六・二五	六・四四	六・六五	六・六五	六・六六	六・三三	七・九二	八・〇七	七・七四	七・八六

例に依つて表中ゴシツク活字の用ゐてある部分は、我國に米穀輸入關稅の存したる時期の相場を示すものである。そこで其の相場の變動の狀況について見るに、大正九年十一月に我國米穀關

稅の復活せられたる際には、盤谷市場に於ける米相場はやはり蘭貢及び西貢市場相場について之を見たやうに段々下落に傾き翌年の四月頃までは其勢を續けて居たが、五月からは又騰貴に向ひ九月からは又少し下落し、十月に我が關稅免除を見たる以後も騰貴の勢には向はず十一月十二月と却つて下落した。この勢はやはり大體に於て我が内地に於ける内地米相場と呼應して居り、格別そこに關稅の影響と思はれるものが無い。

次に大正十二年の米價狀況をみるに、同年十月迄は我國に米穀輸入關稅が存して居たのだが、盤谷米價は前年に比し多少低かつたけれど、その下落の勢は我が米關稅の免除されて居た大正十一年の八月頃から生じた現象であつて、我が關稅の復活されたるに依て生じた現象とは見難い。そしてそれは我が内地米相場の上にも同様に生じた現象であつて、大正十一年四月頃から少し騰貴氣配であつた米價は、八月に至つては下落に向ひ、翌年も大體その勢を持越し五月頃から又少し騰貴氣味になり、盤谷相場と恰もよく相呼應して居る。

そこで參照の爲めに神戸市場に於ける暹羅白米の相場變動の狀況について見るに、一等米卸價格の大正十一年及十二年に於ける月別變動左の如し。²³⁾(百斤につき圓)

第十六表

神戸に於ける暹羅白米卸價格表

一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月

大正十一年 八・三 八・四 八・三 七・四 七・五 七・六 八・九 七・五 六・五 六・三 六・五

大正十二年 六・八 七・六 八・四 八・四 八・五 八・五 九・二 八・五 八・五 八・三 八・五

右表に於て關稅復活の行はれたる大正十一年十一月以後の相場は騰貴に向ひ、其勢は段々強まり乍ら十二年九月まで繼續し、同年十月に關稅免除の行はれると共に少し下落の勢を示した。して見れば關稅は明かに暹羅米の内地市價には影響を及ぼしたことが明かで、其の狀況は上に此の期間に内地米市價の變動した有様を述べた所と併せ攷ふるに於て、明かに之を解得することが出来る。即ち其間内地米市價は反對の傾向を取つて動いて居たのである。

すべて斯くの如くなるが故に暹羅米についても亦我が輸入關稅は、その内地に輸入されたるもの、市價には影響を及ぼすけれど、輸出地に於ける市價には何等見るべき影響を與へ得ないのである。即ち前に私が理論上推斷さるゝといつた所が、事實上論證されるのであつて、つまり暹羅米も我が輸入關稅に關しては蘭貢米や西貢米同様の關係を有する次第である。

以上論證する所に依て私は、結論として、我が米穀輸入關稅は輸入されたる外國米の内地市場價格に對しては影響を及ぼし、關稅賦課さるれば多少その市場を高め、免除さるれば多少その市

價を低く、らしむる効果を有するけれど、輸出地に於ける米穀市價に對しては何等著しき影響を及ぼすことなく、その影響と思はるゝ所は、蘭貢西貢及盤谷の市場に於ける米價の上に終に之を認め得られないと論結し得る次第である。そして米價は我が内地産米の價格も右等外國市場に於ける其地産米の價格も大低時を同くして同じ騰貴若くは同じ下落の方向に向つて變動するものたるを知ることが出來たのである。即ち米穀に關しては一種の世界的市場關係があつて、その全體的なる需給關係により、價格は一般的に同様に變動するものなるを知り得るのである。

我が米穀輸入關稅は、我國が外國より輸入する米穀數量が世界的に之を見たる米穀輸出貿易の全數量に對して比較的僅少なる部分にしか當り得ない爲めに、其の關稅の存廢は、世界的に定まる米穀市價を動かすに足るほどの力を有ち得ないのであつて、そはたゞ僅かに内地市場に於ける輸入米價格を多少動かす所あり得るに過ぎぬ。従て其の關稅は主とし内地の消費者が之を負擔し、又場合によつては取扱商人が多少その分擔を爲すに止まり、輸出地の生産者は之を負擔することなき結果となる。

此の事情からして我が米穀輸入關稅の政策上の意義も致へ合さるゝ次第だが、それに關する研究は他の機會に譲ることゝする。茲にはたゞ實際の狀況だけを闡明するに止めて置く。（完）